

---

 報 告
 

---

## 看護大学生と短大生の卒業直前時における自己効力感の比較

近藤裕子<sup>1)</sup>, 生野繁子<sup>2)</sup>, 榮玲子<sup>3)</sup>,  
 田村綾子<sup>1)</sup>, 市原多香子<sup>1)</sup>, 井手知恵子<sup>4)</sup>,  
 波川京子<sup>5)</sup>, 谷本公恵<sup>6)</sup>, 南妙子<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup>徳島大学医学部保健学科, <sup>2)</sup>九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科, <sup>3)</sup>香川県立医療短期大学看護学科

<sup>4)</sup>大分医科大学医学部看護学科, <sup>5)</sup>広島県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科, <sup>6)</sup>香川医科大学医学部看護学科

**要 旨** 看護学生の卒業直前の自己効力感を明らかにし, 入職後の教育や指導などへの示唆を得る目的で, 看護大学4年生と看護短期大学3年生に一般性自己効力感尺度による調査を行った. その結果, 看護学生の自己効力感は一般学生よりも高く, 大学生は短大生よりも高い傾向が認められ, 入職時には自己効力感をより高める教育や指導の重要性が示唆された.

キーワード: 看護学生, 卒業直前, 自己効力感

## はじめに

近年, 自己の行動を予測し, 遂行を改善する上で重要なものとして自己効力感が注目されている. 自己効力感に関しては, 心理学や社会学の領域で研究が行われ, 学業, 課題認知などの場面<sup>1-4)</sup>において, 自己効力感が行動変容を予測する要因として有効であると言われている. Bandura<sup>5)</sup>は, 自己効力感には2つの水準があり, 人間の行動に影響を及ぼすと考えている. まず一つは特定場面における自己効力感の強さで, これは個人が一定の状況を克服するか否かに影響を及ぼしているとして, これを自己効力感が行動に影響をおよぼす第1の水準とした. 次に自己効力感が行動に長期的な影響を及ぼすという考えを第2の水準とした. 自己効力感の測定は, 主に第1の水準のみを対象として研究が行われてきた. しかし第2の水準である自己効力感の行動に対する長期的な影響を測定する尺度 (一般的な自己効力感の強さを測定) に関する研究はほとんど行われておらず, 日本では東條が自己効力感と locus of control との関連をみる中で, 自己効力感を高くあるいは低く認知する傾向は, 人の行動

を規定するかもしれないことを示唆したと坂野らは述べている<sup>6)</sup>. このような研究の経過を受けて坂野らは, 自己効力感の第2の水準である個人の一般的な自己効力感の強さを測定する尺度開発を行った<sup>6-8)</sup>.

看護領域における自己効力感に関する研究では, 健康行動促進への援助に患者の自己効力感を高める研究<sup>9-10)</sup>や, 臨地実習<sup>11-12)</sup>, 看護学生のストレス認知とストレス・コーピング<sup>13)</sup>, 看護学生の意識の変化<sup>14-16)</sup>などについての研究が行われている.

自己効力感とは, あることを成し遂げることを予測できる, つまり先を見通した計画が立案できる能力と定義でき, 人は自己効力感を得た結果, 努力や, 達成感をもつことができる. この能力は, 自然発生的に生ずるものではなく, ①自分で実際に行ってみること (遂行行動能力の達成), ②他者の行為を観察すること (代理的経験), ③自己教示や他者からの説得的な暗示 (言語的説得), ④生理的な反応の変化を体験してみること (情動的喚起), などといった情報を通じて, 個人が自ら作り出していくものと考えられている<sup>5)</sup>. そのため個人がどのように自らの自己効力感を認知しているかが, その人の行動の変容を予測し, 情動を抑制するかの要因になっていることが, 先行研究で明らかにされてきた. 看護学生がもっている自己効力感に関する先行研究<sup>17)</sup>からも, 自己効力感を高めることは, 自らの言動に自信ができ, 進むべき方

2003年2月20日受理

別刷請求先: 近藤裕子 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15  
 徳島大学医学部保健学科看護学専攻

向性を決定し、学習の促進や患者ケア能力の向上に関連することが明らかとなっている。

今回、卒業直前の看護学生がもつ自己効力感を把握することは、入職後において教育や指導などの支援を行う資料として意義があると考え、大学生と短期大学生における自己効力感を比較した。

## 目 的

看護短期大学と看護系大学における看護学生の、卒業直前の自己効力感を検討し、入職後の教育や指導などへの支援資料とする。

## 方 法

坂野らの一般性自己効力感尺度(坂野, 東條, 1986)<sup>6)</sup>(表1)を使用し、看護系大学2校の4年生(196名)と、3年制看護短期大学2校の3年生(142名)に対して、2001年12月に調査を実施した。学生には調査前に調査の趣旨と、評価と無関係であること、自由参加であること、個人の識別はせずプライバシーを守ることなどを説明し、協力の得られた者のうち大学4年生78人(39.8%, 平均年齢21.3歳)(以下大学生)、短大3年生113人(79.9%,

表1 自己効力感の質問項目

1	何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである
2	過去におかした失敗やいやな経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある
3	友人よりすぐれた能力がある
4	仕事を終えた後、失敗したと感ずることのほうが多い
5	人と比べて心配性なほうである
6	何かを決める時、迷わずに決定するほうである
7	何かをする時、うまくいかないのではないかと不安になることが多い
8	引っ込み思案なほうだと思う
9	人より記憶力がよいほうである
10	結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んで行くほうだと思う
11	どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれないことがよくある
12	友人よりも特にすぐれた知識を持っている分野がある
13	どんなことでも積極的にこなすほうである
14	小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである
15	積極的に活動するのは、苦手なほうである
16	世の中に貢献できる力があると思う

2, 4, 5, 7, 8, 11, 14, 15の項目は、回答を反転して計算する項目である。

平均年齢21.4歳)(以下短大生)の結果を有効として集計した。教育課程別に自己効力感得点の平均値と標準偏差を算出し、paired-t検定を行い教育課程別の有意差を検討した。次に自己効力感の評定点を、坂野らの5段階評定値に換算して割合を算出した。さらに自己効力感尺度の16の質問項目における、「はい」または「いいえ」の回答を選択した者の人数を項目ごとに計算し、大学生と短大生の回答割合を比較するとともにχ<sup>2</sup>検定を行い、有意差を検討した。

今回使用した一般性自己効力感尺度は、坂野と東條により開発されたものである。この尺度は個人の特定の先行経験の違いによって影響を受けない一般的な自己効力感の高さを測定する。尺度の内容は、教示文として16の質問項目から構成され、評定は「はい」または「いいえ」の2件法で回答し、得点範囲は0～16点である。得点が高いほど一般性自己効力感が高いこととなる。自己効力感の程度を学生の場合には、5段階評定点で自己効力感得点が12以上を「非常に高い」、9～11を「高い傾向にある」、5～8を「普通」、2～4を「低い傾向にある」、1～0までを「非常に低い」としている。

## 結 果

大学生の自己効力感の平均値は8.18 (SD3.57)、短大生は7.51 (SD3.74)であった。それぞれの得点の範囲は大学生15～0、短大生は14～0であった。課程別に検定を行ったが両者の間に有意差はみられなかった。自己効力感評定点を5段階区分した割合をみると、12以上の「非常に高い」の得点が得られた者は、大学生23.1%、短大生は15.9%であった。次に「高い傾向にある」の割合は大学生20.5%、短大生30.1%、「普通」は大学生39.7%、短大生27.5%、「低い傾向にある」は大学生12.8%、短大生21.2%、「非常に低い」は大学生3.8%、短大生5.3%であった。

自己効力感尺度別に「はい」「いいえ」の回答割合から有意差をみたのが表2である。この表から大学生は自己効力感尺度項目3の「友人よりすぐれた能力がある」、12の「友人よりも特にすぐれた知識を持っている分野がある」、16の「世の中に貢献できる力があると思う」の尺度に、短大生と比較して $p < 0.05$ の有意差がみられた。他の項目に有意差は認められなかったが、尺度項目13の「小さな失敗でも人よりずっと気にする方である」の項目は、「はい」と回答した短大生が多かった。

表2 大学・短大生別自己効力感の項目別得点割合

尺度 番号	大学生 n=78		短大生 n=113		有意差
	はい	いいえ	はい	いいえ	
1	50.0%	50.0%	47.8%	52.2%	
2	47.4	52.6	49.6	50.4	
3	51.3	48.7	29.2	70.8	p<0.01
4	24.4	75.6	24.8	75.2	
5	73.1	26.9	70.8	29.2	
6	29.5	70.5	22.1	77.9	
7	62.8	37.2	61.9	38.1	
8	43.6	56.4	46.9	53.1	
9	33.3	66.7	31.3	68.8	
10	55.1	44.9	54.9	45.1	
11	43.6	56.4	38.9	61.1	
12	50.0	50.0	31.9	68.1	p<0.05
13	48.7	51.3	52.2	47.8	
14	39.7	60.3	48.7	51.3	
15	35.9	64.1	35.4	64.6	
16	78.5	20.5	65.5	34.5	p<0.05

□検定

- 注) 1. 尺度番号は表1の自己効力感の質問項目番号である。  
2. 「はい」「いいえ」は、項目の回答である「はい」「いいえ」に回答した割合を示す。

## 考 察

卒業間近な看護学生の自己効力感得点の平均値は、大学生8.18 (SD3.57), 短大生7.51 (SD3.74) であり、これを坂野ら<sup>6)</sup>による学生の平均値6.58 (SD3.37) と比較すると、看護学生の自己効力感得点は、一般学生より高い値を示している。この結果から看護学生は、一般の大学生より自己の意志で将来に展望をもち、積極的に問題解決行動に取り組む傾向の強さを表している。これは調査時期が12月であったことから、就職が内定している者が多く、看護職に就くという目標達成を成就し、成功による内発的強化が自己効力感に影響し高い値となっていると考える。さらに臨地実習において多様な人々との出会いや体験・ケアの経験などから、問題解決能力やクリティカルシンキング能力などを向上させ、自己効力感を高めていると考える。

大学生は自己効力感尺度の各項目においても、友人より優れた能力や、優れた知識を持つ分野、貢献する力などを高く評価している。これらの項目は能力の社会的位

置づけに分類される項目であり、大学生は、Banduraのいう一般的で社会的な場面において自己の遂行を高く評価する傾向にあると言える。自己効力感の他の2分類である失敗に対する不安や、行動の積極性においても、失敗への不安を軽減させながら積極的に行動を行っていると考えられる。他方、短大生は大学生よりも行動への自信や、失敗に対する不安などの分類において、大学生よりも自信の程度が弱い傾向にあると考えられる。自己効力感を経験を積むことにより高まるといわれており、1学年長く学生を続けている大学生の得点が高い結果は当然と考える。しかし大学生と短大生の平均年齢差は認められない状況からは、専門教育を受けている期間の長短が、看護学生の行動に対する自信につながっていると推測できる。

以上から、入職後も自己効力感を高める支援として大学生に対しては、行動遂行の可能性をより向上させるために、自己の振り返りを行うなどで自己強化をはかることや、実施した内容を評価し、フィードバックしていくことが必要であろう。他方短大生には、特に行動決定のベースとなる問題解決能力を高め、遂行行動の成功体験をもてるように段階的な目標設定を行うことが必要と考える。それと共に周囲の者は、学生自身の能力や努力を認め、自信をもてるように支援する環境造りを行っていかねばならない。しかし自己効力感を短期間で高めることは難しく、さまざまな看護場面を捉え、継続的に関わりをもちながら、その成長過程を肯定的に評価し、支援していくことも重要と考える。

## 結 論

看護大学生と短大生の卒業直前の自己効力感を測定した結果から、以下のことが明らかとなった。

1. 看護学生の自己効力感は一般学生よりも高い結果であった。大学生の自己効力感は短大生よりも高い傾向が見られた。
2. 大学生は知識や能力を高く評価しており、行動に対して自信をもっている。

## 文 献

- 1) 伊藤宗達：学業成績場面における自己効力感，原因帰属，学習方略の関係，教育心理学研究，44(3)，340-349，1996。

- 2) 蓑内豊：課題の重要度の認知が自己効力感の変化に及ぼす影響，教育心理学研究，41(1)，57-63，1993.
- 3) 桜井茂男：自己効力感が学業成績に及ぼす影響，教育心理，35，140-145，1987.
- 4) 藤生英行：挙手と自己効力感，結果予期，結果価値との関連性についての検討，教育心理学研究，39(1)，92-101，1991.
- 5) Bandura, A.：自己効力感（セルフ・エフィカシー）の探求，祐宗省三他訳，編著，社会的学習理論の新发展，金子書房，1985.
- 6) 坂野雄二，東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み，行動療法研究，12(1)，73-82，1986.
- 7) 坂野雄二：一般性セルフ・エフィカシー尺度の—妥当性の検討—，早稲田大学人間科学研究，2(1)，91-98，1989.
- 8) 坂野雄二，東條光彦：セルフ・エフィカシー尺度，上里一郎監修：心理アセスメントハンドブック，西村書店，478-489，1998.
- 9) 平元泉：小児糖尿病キャンプの効果—自己効力感を視点として，秋田大学医療技術短期大学部紀要，10(1)，41-47，2004.
- 10) 神谷千鶴，三島明子，今井雪香，他：慢性血液透析患者の健康行動に対するセルフエフィカシーと患者属性との関連，日本腎不全看護学会雑誌，3(2)，63-65，2001.
- 11) 山崎章恵，坂口しげ子，百瀬由美子：看護学生の自己効力感を高める実習指導の検討—自己効力感が低い学生の実習中の体験から，信州大学医療技術短期大学部紀要，27，41-48，2002.
- 12) 山崎章恵，百瀬由美子，坂口しげ子：看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因，信州大学医療技術短期大学部紀要，26，25-34，2001.
- 13) 齋藤真澄，岡山晴海，草島綾子，他：大学生のストレス認知とコーピング—セルフエフィカシーが与える効果の検討，看護総合科学研究会誌，2(2)，52，1999.
- 14) 神戸美和子：看護学生のキャリア志向と時間的展望，日本看護学教育学会誌，11(2)，1-10，2001.
- 15) 永嶋由理子：看護学生の学習意欲の検討，山口県立大学看護学紀要，5，39-45，2001.
- 16) 河村彰美，中川雅子，藤田淳子，他：看護学生における看護婦のアイデンティティ形成と志望理由・学習進路との関係，京都府立医科大学医療技術短期大学部 紀要，10(1)，91-99，2000.
- 17) 伊東久恵，近藤裕子，猪下光，他：質問紙法を併用した進路指導面接—学生の自己効力感を高めるために，香川医科大学医学部看護学雑誌，6(1)，69-74，2002.

*A study on self-efficacy which students have just before graduation ; a comparison between students of nursing universities and those of junior colleges*

Hiroko Kondo<sup>1)</sup>, Shigeko Shono<sup>2)</sup>, Reiko Sakae<sup>3)</sup>, Ayako Tamura<sup>1)</sup>, Takako Ichihara<sup>1)</sup>, Chieko Ide<sup>4)</sup>, Kyoko Namikawa<sup>5)</sup>, Kimie Tanimoto<sup>6)</sup>, and Taeko Minami<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Major in Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

<sup>2)</sup>Kyushu University of Nursing and Social Welfare, Kumamoto, Japan

<sup>3)</sup>Department of Nursing, Kagawa Prefectural Collage of Health Sciences, Kagawa, Japan

<sup>4)</sup>School of Nursing, Oita Medical University, Oita, Japan

<sup>5)</sup>Hiroshima Prefectural Collage of Health Sciences, Hiroshima, Japan

<sup>6)</sup>School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa Medical University, Kagawa, Japan

**Abstract** We conducted a survey of fourth-year students at a university nursing program and third-year students at a nursing junior college, using a general self-efficacy scale. Our purpose was to investigate self-efficacy beliefs among nursing students immediately before graduation and find out what sort of education and guidance should be offered to nurses after they are employed. This survey revealed that nursing students has higher self-efficacy belief than other university students and that self-efficacy tended to be even higher among university nursing program students than among junior college nursing students. The result suggest that education and guidance are important for improving even more the self-efficacy of newly employed nurses.

*Key words* : nursing student, immediately before graduation, self-efficacy